考古学からみたモノと人間

谷川 章雄（早稲田大学人間科学部）

An Archaeological Viewpoint of Materials and Human Beings
Akio TANIGAWA (Waseda University School of Human Sciences)

1. 考古学とは何か

考古学は「過去人類の物質的遺物（に拠り人類の過去）を研究する」（浜田 1922）学問であり、換言すれば、モノと人間の関係を読み解く学問である。

考古学は、土中に埋もれた過去の人間の活動の痕跡である遺跡を対象としている。遺跡は大きく分けると、住居址や墳墓、貝塚など大地に残された遺構と、土器や石器などの遺物によって構成されている。そして、住居址からそこで生活していた人々の使っていた土器や石器が出土するように、各々が複雑な関係をもって存在している。考古学者が遺跡を発掘するのは、こうした様々なモノとモノとのネットワークを取り出すことを目的としているのである。

このようにして観察・記載された遺跡の様々なデータを集積しつつ分析し、その背景にあった人間の文化、歴史について解釈するのが、考古学という学問の基本的な作業である。

2. モノの生産・流通・消費

一般に、モノは生産から流通、消費という過程を経て、最後に廃棄される。こうしたモノのあり方は遺跡を通して認識することが可能である。

たとえば江戸時代を例にとれば、生産については、陶磁器の窯跡のような生産遺跡が存在する。流通を直接示す遺跡としては、商品を積んだまま沈没した船などがあるが、消費地の遺跡から出土するモノを生産地ごとに検討することによって、流通の問題を明らかにすることができる。また、都市や村などの消費地の遺跡から出土したモノを分析して、その生活を復原することも可能である。消費地の遺跡から出土するモノは、一般にはゴミとして捨てられたものが多いが、たとえば墓の副葬品のように、意図的に埋められたものもある。

つまり、遺跡を通して認識されるモノの背景には、生産・流通・消費という人間の活動が存在しているのである。

3. 磁器の生産・消費をめぐって

上述のような生産から消費にいたる問題を江戸時代の磁器を例にとって考えてみよう。

日本の磁器生産は16世紀末に肥前地方で始まった。そして、17世紀中葉に著しい技術革新を遂げ、万治2年（1659）のオランダ東インド会社の注文から輸出時代を迎える。こうした

海外輸出で活況を呈するなかで、鍋島藩窯や柿右衛門窯の製品などが作られ、技術的にも頂点にのぼりつめていく。17世紀末になると、中国の清朝磁器の輸出復活、イギリスによるオランダ東インド会社の圧迫などによって、輸出は不振となり、国内市場への比重が高まって、価格を下げるための技術改良が行なわれた（大橋 1989）。

陶磁器の普及を大消費地であった江戸でみると、18世紀前半までは肥前の製品が主体を占めているが、それ以降は瀬戸・美濃の製品の割合が増加する傾向にあり、その決定的な要因は19世紀の瀬戸・美濃産磁器の出現にあったと指摘されている（森本 1991）。肥前の製品として普及した磁器が、その後に瀬戸・美濃の製品にシェアを奪われていくのである。柳田国男は、人々が磁器の器にひかれた理由について、清潔さ、白さ、正円の形の美しさ、口をつけた時の感覚などをあげている（柳田 1939）。こうした心性が磁器の普及の背景にあったことも重要である。

このように、磁器の普及には生産地の事情と消費地の動向、さらにはそれを求める人々の心性が関わっていたのである。

4. モノと社会・家・個人

モノと人間の問題は、単なる生産・流通・消費の問題にとどまらない。

たとえば、近世都市江戸の墓制を検討してみると、18世紀前半に、埋葬施設の構造が將軍から都市下層民にいたる身分・階層の表徴として認識されるようになったことがわかった。また、村落でも同じ頃に墓標を建てるのが一般的になり、戒名の格式が受容される（谷川 1996b）。これは、モノと社会の秩序の関係を示す一例である。

それとともに、身分・階層の表徴であった江戸の墓は家の格式・伝統のなかで持ち伝えられていくものであり、村落の墓も家意識や家の格式が強く反映したものであった。ここには、モノと家の関係を読み取ることができるのである。

また、江戸の墓で遺体とともに納められる副葬品をみると、そのなかに個人の持ち物が含まれている。たとえば、大名墓である長岡藩主牧野家の墓では、文房具・化粧道具・装身具などの個人の持ち物が副葬されていた。また、旗本の墓では、袴・食器・柄鏡・扇子・玩具など個人の持ち物を想定できるものが含まれており、下級武士から町人を葬ったと推定される墓地では、副葬品のうち煙管・数珠・櫛などが個人の持ち物であったと考えられる（谷川 1996a）。

個人の持ち物は墓の副葬品だけではない。江戸時代を通じて次第に個人の持ち物が増えていき、とくにそうした意識が広がっていくのは都市江戸での影響が大きいと指摘されている（塚本 1993）。

このように個人の持ち物が増加する傾向は、江戸時代以降現在まで認められる。人々が個人の持ち物をのぞむのは、直接には欲望の問題であろうが、別の見方をすれば個人意識の高まりが背後にあったと考えられる。

個人の持ち物が増えることによって、かつて存在したモノを通した人間関係は分断される方向に向かっているが、だからと言って、その背景に存在する個人意識を一方的に否定することは難しいだろう。

以上述べてきたように、考古学から読み解くモノと人間の関係は、現在のありようを認識するためのひとつの手段となるのである。

引用・参考文献

- 大橋康二 1989 『肥前磁器』 ニュー・サイエンス社
- 鈴木公雄 1988 『考古学入門』 東京大学出版会
- 谷川章雄 1996a 「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」『江戸遺跡研究会第9会大会 江戸時代の墓と墓制』
- 谷川章雄 1996b 「江戸および周辺村落における墓制の変遷」『「中世」から「近世」へ』 名著出版
- 塚本 学 1993 「江戸時代人の持ち物について」『特別展「江戸のくらし」記念講演会・座談会報告書』 新宿区教育委員会
- 浜田耕作 1922 『通論考古学』 大鐙閣
- 森本伊知郎 1991 「江戸市中の物資流通と生活用具」『甦る江戸』 新人物往来社
- 柳田国男 1939 『木綿以前の事』